

小児の肺炎球菌感染症の予防接種について

肺炎球菌による感染症について

肺炎球菌は、乳幼児の鼻咽頭に高い割合で定着する常在菌で、飛沫感染により伝播する小児の細菌感染症の主要な原因菌です。保菌者の全てが発症するわけではなく、免疫力や抵抗力の低下や粘膜バリアの損傷などにより、菌が体内に侵入すると発症します。

疾患としては、髄膜炎、敗血症・菌血症、肺炎、中耳炎など多岐にわたりますが、特に髄膜炎をきたした場合には、死に至ることもあり、救命しても難聴、精神の発達遅滞、四肢の麻痺などの後遺症を残す可能性があります。また、小さい子どもほど発症しやすく、特に2歳未満の乳幼児でのリスクが高いとされています。

肺炎球菌ワクチンについて

肺炎球菌による感染症を予防するワクチンです。90種類以上ある肺炎球菌血清型のうち重症感染症から分離される頻度の高い13の血清型(1, 3, 4, 5, 6A, 6B, 7F, 9V, 14, 18C, 19A, 19F, 23F)の莢膜を精製し、免疫効果を高めるためにキャリア蛋白を結合させた結合型ワクチンです。

副反応

副反応としては、局所反応として腫脹、紅斑、硬結など、全身反応として主なものは発熱、易刺激性、傾眠状態などが認められています。重い副反応としては、非常にまれにショック、アナフィラキシー、けいれん、血小板減少性紫斑病等が報告されています。

対象者及び接種スケジュールについて

生後2か月以上5歳未満(5歳の誕生日の前日まで)

※対象年齢を過ぎると、公費での接種は受けられなくなります。

※2回目以降の接種は、ワクチンを接種した日の翌日から起算してください。

1回目接種開始月齢

接種間隔

生後2か月以上
7か月未満

初回接種：27日以上の間隔で3回 ※生後24か月未満(標準的には生後12か月まで)
※2回目の接種が生後12か月を超えた場合、3回目の接種は行わないこと
追加接種：生後12か月以降に、初回接種終了後、60日以上の間隔をおいて1回
(標準的には生後12～14か月の間に)



※2回目、3回目が生後24か月を超える場合は2回目、3回目は行わず、60日以上の間隔をあけて追加接種を実施。また、2回目が生後12か月を超える場合、3回目は行わず、60日以上の間隔をあけて追加接種を実施。

生後7か月以上
12か月未満

初回接種：27日以上の間隔で2回 ※生後24か月未満(標準的には生後12か月まで)
追加接種：生後12か月以降に、初回2回目終了後、60日以上の間隔をおいて1回



※2回目が生後24か月を超える場合は2回目は行わず、60日以上の間隔をあけて追加接種を実施。

12か月以上
24か月未満

60日以上の間隔をおいて2回 1回目 → 60日以上 → 2回目

24か月以上
5歳未満

1回のみ 1回目

接種時に持参するもの

- ① 小児用肺炎球菌ワクチン接種予診票
- ② 母子健康手帳(接種歴を確認するとともに、予防接種を受けたことを記録します。)